

# 勝林寺々報

ありがたや節

「ものは思いよう」  
 「災いも思いよう受けとりようで、しあわせの種となる」

もつともらしくそのように説いている宗教もありません。

いかなること、どんなことも、ありがたやもつたいなやと思いなおしてくらすことが、それが宗教信者の謙虚な敬けんな生きかたであるように教えているのです。

どんな災いでも不幸でも、たとえ間違っていることでも、みんなみんな無条件に認め受け容れ許してしまふ宗教。そんな宗教を私は「有難や節の宗教」とよんでいますし、そのような宗教は、人々をアキラメのなかにねむらせてしまふ麻薬・アヘンのような宗教だと思いません。

人の身を受けることはむずかしい。しかし今わたしは人間に生れている。

仏法に出会うことはなおむずかしい。しかしわたしは今ほとけの教えに出会えている。

如来のいのちのはたらきのなかに生かされることはなおおむずかしい。しかしわたしは今如来さまのいのちからのさげ「念仏」のなかに生れかわらせていたゞいてる。

そのことをよろこび合おうとすすめてくださるのが仏法です。

いふなれば、お念仏に出会わせていただいた「ご縁」の不思議さをよろこぶのです。

おもつてみればあれもこれも私を「お念仏」に導き入れるための「ご縁」であつたと、そのことをよろこばせていただくのがほんとの仏法者の生きかたでしょう。

でありますから、たとえば私がお念仏に会わせていたゞくのをも、もし邪魔をしたり弾圧をしたりする者がいたとするならば、それにはだんことしてたゞかつていかねばならないのです。お念仏の敵をも「ありがたや」と受け容れなさいとは、すくなくとも親鸞さまは教えられませんでした。

お念仏に敵対するなら、それがたとえ天皇であらうとも絶大な権力をもつた比叡い山であらうとも、キツバリとした抵抗の姿勢を終生くずさなかつたのが親鸞さまでありました。

わたしにとつて何が何ゆえに有難いのかをはつきりと見定める目が真実信心の目なのです

(「勝林寺テレホン法話」より)

一日一日を

生きていくことは

苦しい。

一日一日を

生かされていることは

楽しい。

「みのりを聞く会」は二十五日

毎月二十五日夜は「みのりを聞く会」です。十二年目になります。遠いところから毎月おかささんを車にのせてお参りくださる方もあります。今年どうぞそそいあつてお参りください。

「十六夜会」は十五日、「玉日会」は十日

「十六夜会」は若婦人の誦法の集い。毎月十五日(ただし一月のみ十日)会場は本覚寺。夜七時半。

「玉日会」はおとしより婦人の誦法会。毎月十日昼二時から。会場は備成寺。

## 心光照護

新年明けまして

おめでとう

ございます。

勝林寺

代表役員

仏教青年会

仏教婦人会

- |     |     |     |     |    |     |     |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |    |    |    |    |    |    |    |
|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| 岩上  | 藤川  | 衣川  | 金久  | 数森 | 永井  | 岩上  | 坂本 | 横山 | 宮嶋 | 永井 | 大石 | 谷垣 | 平野 | 田中 | 亀井 | 中井 | 永井 | 山田 | 兼井 | 森戸  | 西池 |
| 加代子 | 貴恵子 | かめ子 | 八重子 | 敏子 | ひろ子 | 三喜子 | 滋子 | 弘三 | 千秋 | 勉和 | 正雄 | 逸雄 | 稔雄 | 保夫 | 幸男 | 有隆 | 貞雄 | 健一 | 正規 | 三代治 | 匡治 | 由衣 | 卓馬 | 秀子 | 功子 | 際子 | 哲俊 |



一月のこよみ

- |      |                       |
|------|-----------------------|
| 一日   | 修正会                   |
| 二日   | 〃                     |
| 三日   | 〃                     |
| 四日   | 但東町切参・湯口留道氏宅報恩講法座     |
| 五日   | 門徒総代会                 |
| 六日   | 檀越報恩講                 |
| 七日   | 〃                     |
| 八日   | 〃                     |
| 九日   | 坪口報恩講                 |
| 十日   | 〃                     |
| 十一日  | 〃                     |
| 十二日  | 坪口女中講                 |
| 十三日  | 檀越女中講                 |
| 十五日  | 出石組坊守会                |
| 十七日  | 〃                     |
| 十九日  | 横山吉二氏宅法事              |
| 二十日  | 兵庫教区教化推進協議会在町推進大会(神戸) |
| 二十一日 | 〃                     |
| 二十四日 | 本山管轄部本郷寺門部会(京都)       |
| 二十五日 | 〃                     |
| 二十六日 | 勝林寺仏教婦人会総議員会          |

079652・5800番

勝林寺テレホン法話

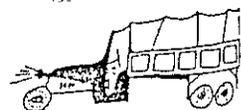
いつでもどこでも法話が聞かれます。受話機をとつてダイヤルしてみてください。一日と十日と二十日に法話がかかります。はじめてから三年目になりました。テレホン法話をみんなですだててください。

葬儀

十二月十二日

上小田

斎藤清一様



私のお念仏

宮嶋 千秋

なにかかたづかないままに、また一年すぎてしまいました。

生かされていることの不思議さなど、お寺にお参りしお聴聞させていただいたりして私なりにいろいろと思いを寄せさせていただいておられます。

それであるのにせいたく不平や不満が出てまいります。出てくるにつけても、如来さまのお慈悲というものを、実は身近かなところで益信じさせてくださるにさせていただいていることを思わずにはおられません。

だいたいちに自分のいのちを信じ、またまわりをあてにし、家族をたよりにし、広くは社会に よりかゝつていられるのでございます。

そういうなかにくらしておればこそ、まず安心な毎日であり、夜になれば家もあり安心してねむることもできます。

いいかえますと、私や周りのものや人々たちが、私が安心してよりかかることのできる状態を作り保ちつづけていくにさるからだと思います。

みんなが私にしろあせなくらしがでる社会をつくるためにはたらくにさる多くの人のあることを忘れることはできません。

もしも、互に信じたよることのできないような状態になつたとしたら、生きていくことさえ困難になることは間違いないと思います。

このように、私をとりまいて、そのなかに私がお安んじてくらすよう働いてくださるお念仏のはたらきのなかで、私は生かされているのだと思います。

そんな大きな力が如来さまのおはからいの不思議な力といただいているのでございます。

いまも阿弥陀さまは、私の心のなかへも、またからだのなかへもたしなめたことばをお念仏のなかからくださつていられるように思います。

「こんなことはしてくるなよ」「そんなことは言うではないぞ」「そうしたことは思うまい」

私はしかしそれを聞かずに悪いほう悪いほうへと行つてしまふようななきなさい者であります。

南無阿弥陀仏をとらうれば

十方無量の諸仏は

百重千重圍繞して

よろこびまもりたまうなり

という親鸞さまのおうたに出会つたことがあります。

いくらだめでも、まただめだからこそ私につききり捨てないで、今までもこれからは生かして下さつてくださつていられるのだと思ひ、生かされていられるよろこびとともに、その責任の重さを感ぜずにはおられません。

たとえ浅間しい日ぐらしであつても、このお念仏のおはたらきを思うなかで、人々のご恩をよろこび周囲を信じるころ喜ぶころは限りなく続いてくださることです。

そう信じつつ称えるお念仏には、またまた生かされる喜びと力がわき出てくるように思うのです。

なにげなく迷い迷いながらくらすせていたよいていながら「安心とは信じられることだ」と今さらながら気づかせていただいたにさるようなこととございます。

新しい年を迎えるにあたり、心あらたにお念仏に生かされつゝ、人々の社会のご恩を感謝しつゝ、この年もくらすせていただきたいと、またお念仏申す私でございます。

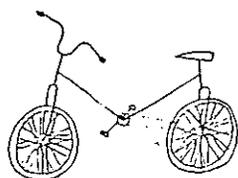
まよいつつも

安らかにある

めぐみをば

み名となえつ

思ううれしさ



当分の日程

二月

一日 成田藤明氏宅葬月

二日 中西正氏宅葬事

八日 本山研修

九日 齋藤保氏宅葬事

十日 本山研修

十三日 教区教推協委員会

十六日 代議委員会

十七日(二十一日) 福高教区住職研修会講師

二十三日 勝林寺本社総会

二十四日 教区教推協委員会(二十五日)

三月

九日 玉井敬介氏宅葬事

十八日(二十日) 津路山照禪寺彼岸会法話

二十一日 島屋善立寺彼岸会法話

二十二日 谷垣なつ子氏宅葬事

二十三日 平野秀雄氏宅葬事

二十四日 勝林寺「彼岸会」

二十六日 中嶋勲氏宅葬事

二十九日 田中幸一氏宅葬事

三十日 坂本貞氏宅葬事

四月

六日 数森一男氏宅、山田弘氏宅葬事

十三日 清水儀一氏宅葬事

二十日 齋藤政夫氏宅葬事

二十七日 出石組「連研」

二十九日 兼井彰子氏宅葬事

年の瀬に



「それ秋も去り春も去つて、年月をおくることきのも過ぎ今日も過ぎ、いつの間にかは年老のつもるらんともおぼえず知らざりき」

七十歳の蓮如さまの年の瀬の思いでしよう。いえ、蓮如さまならずとも人みな同じこととしがよるほど過ぐる年月のはやいこと。

ひととせ すぎやすし。 一生すぎやすし。

善行をほこり

それを人におしつける人がいる。

善行からうまれる弊害をおそれて

気づきりできる人がいる。

あゝもしたかつた、こうもしたかつた。あの人もこの人ももつと交りを重ねたかつたのに、など。過ぎしひととせに恨みとくやみと悲しみばかりのこの私たちの年の瀬なのでしようか。

「ただいたずらに明しいたずらにくらして、老いのしらがとなりはてぬる身の浅間しきこそ悲しけれ」

ところが蓮如さまは、そうなげきながらも少しも悲しい顔をなさいません。それどころか、歎びのお念仏をなさるのです。

「これによつて、ここに未来悪世のわれらごとき衆生を、たやすくたすけたまう阿弥陀如来の本願のましますと聞けば、まことにたのもしく有難く思はんべるなり」

この一年、すべてまとはずれあてはずれ、後悔の恨みだけを残して、たゞいたずらに過ぎたといはずらに老をかきたぬけらるるような私を、その私をこそそれなるがゆえに呼んでくださる阿弥陀如来の切ない願いのなかの私の一年であつたことよ。なれば、このもつたいなさ、このよろこびを、もし次の年のちあるならばお念仏申し、お念仏を人にも伝え、お念仏のなかでまた力いつばい生きていこう。

法(のり)を聞く みちどころの 南無阿弥陀仏と となえこそすれ

年の瀬の 蓮如さまの なげきとそしてよろこびのうたでした。

(「勝林寺テレホン法話」より)